The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No.25 2021

亀井昭陽「東遊賦」　訳注　（三）

野田　雄史

龜井昭陽「東遊賦」　譯註　（三）

野田　雄史

長崎外大論叢

第25号
（別冊）

長崎外国語大学
2021年12月

【翻訳】

亀井昭陽「東遊賦」　訳注　（三）

野田　雄史

龜井昭陽「東遊賦」　譯註　（三）

野田　雄史

概要　（Abstract / Short Outline）

24号（2020年）に掲載した「龜井昭陽『東遊賦』譯注（二）」の続きである。

「二」では駿河路を進んで薩埵峠に到着していた。前段では田子浦を遠望する様子が描写されていたが、今回も引き続き薩埵峠付近からの眺望から始まる。余程見晴らしのよいところだったのだろう。

第十四段135・136句で、一ヶ月半に亙った行程を終え、江戸に入り、残りの部分は江戸の繁華を描写する。

第十五段158句をもって全文を終える。

這是「龜井昭陽『東遊賦』譯注（二）」（登載於本紀要25號／2021年）的後續。

「二」中昭陽經過駿河地方到達薩埵嶺。上一段描寫了他遥望田子浦的樣子，這一回繼續從薩埵嶺附近遥望。這可能是一箇風景非常好的地方。

於第十四段135・136句，持續一箇半月的旅程結束了，到達江戸，剩餘部分描寫江戸的繁華。

以第十五段158句結束全文。

キーワード

日本の江戸時代の辞賦作品 , 楚辞離騒型句 , 日本漢文 , 東海道

第十二段　（109 ～ 124）

豆嶂峮嶙以横溟兮		豆嶂峮嶙（きんりん）として以て溟に横たはり
富嶽玲瓏于天宮	上平１東	富嶽天宮に玲瓏たり
妙矣絶代之神姿兮		妙なるかな絶代の神姿
獨于宇宙而修容	上平３鍾	獨り宇宙に修容す
出蒲原杭溢流兮		蒲原を出でて溢流（ほんりう）を杭（わた）る
船旋轉如飛蓬	上平１東	船旋轉して飛蓬の如し
三島盡足指昂兮		三島盡く足指昂（あが）り
履凝霜于相中	上平１東	凝霜を相中に履む
箱根險石巖巖兮		箱根險石巖巖（さんさん）たり
木轇轕日朦朧	上平１東	木は轇轕（こうかつ）として日は朦朧たり
籥浮雲以上驤兮		浮雲を籥（ふ）むに上驤を以てす
湖漩澴于高峰	上平３鍾	湖高峰に漩澴（せんくわん）たり
疲馬樂飢于勺飲兮		疲馬飢ゑを勺飲に樂しみ

騒人奪魂于天工	上平１東	騒人魂を天工に奪はる
候勞我以兕觥兮		我を勞ふに兕觥を以てするを候（ま）て
斗酒入神始雄	上平１東	斗酒神に入りて始めて雄なり

［語注］

豆嶂 「嶂」は屏風のように切り立った険しい山。「豆」は伊豆国を指す。伊豆国を簡称で「豆州」と略す。なお、「伊州」は伊賀のこと。他に「伊」で始まる国名は、伊勢が「勢州」、伊予が「予州」である。従って「豆嶂」で、「伊豆国の屏風のように切り立った険しい山」となる。今作者は薩埵峠まで来て（106句）向かう方角に田子の浦を眺めているが、右手を見ると駿河湾を隔てて伊豆半島が東に見える。南北に伸びる伊豆半島の山を屏風に見立てたものだろう。

峮嶙 張衡の「南都賦」にも使われ、山の連なるさまを表わす。底本は「峮」を「山居」の二字に作るが、それでは意味が通じない。注本に従う。なお、「峮」は注本及び文選の張衡南都賦で「山」を上にするが、大漢和辞典は集韻を引いて「峮」とする。注本の字形がユニコードにないので大漢和辞典の字形に従った。

豆嶂峮嶙以横溟兮 富嶽玲瓏于天宮 共に一字多い。絶景に圧倒された昭陽の気持ちが反映されている。

妙矣絶代之神姿兮 107句に引き続き句の切れ目が上に来る破格である。最上の賛辞である。

宇宙 本義は家屋を構成する重要な部材だが、転じて宇は空間、宙は時間を指し、宇宙で古今東西の意となる。

獨于宇宙而修容 こちらは通常の字余り。空前絶後の絶景であることを強調する。

杭 川をわたる意。

溢流 川の激しい流れ。注本に「水溢也言富士川」とある。蒲原宿のすぐ東が富士川である。

出蒲原杭溢流兮 字数は正則だが四文字目の助字であるべきところが実字になっている。激流を渡ることを強調する。

飛蓬 秋の枯れ野を風に吹き飛ばされる蓬。なお、「蓬」の訓読みは「よもぎ」であるが、日本語の「よもぎ」とは異なる植物である。

昂 あがる。注本に「言地漸漸高」とある。上り斜面を踏むと踵よりも爪先が高くなるが、それを「ずっと足の指が上がったまま」と表現した。

三島盡足指昂兮 字数は正則だがリズムの切れ目となる助字が三文字目に来ていて正則と異なる。「足指昂」という表現を強調する。

凝霜 霜のかたまり。

相中 三島から箱根峠を越えると相模国となり、箱根関がある。

齾 歯ががたがたしているさま。

箱根險石齾齾兮 ２－２－２のリズムで、道の険しさを強調する。

轇轕 まじりみだれるさま。轇轕、共に見母の双声。

木轇轕日朦朧 四文字目の助字であるべきところが実字になり、３－３の対で道の鬱蒼と暗い様を示す。

籥 天馬歌（郊祀歌十九章其十 漢書禮樂志）に「籥浮雲，晻上馳。」とあり、その蘇林の注に「籥音躡。言天馬上躡浮雲也。」とある。

驤 馬がはしる時に首をあげる意。注本に「與詩上襄同」とある。これは詩經鄭風の大叔于田第三章の「叔于田 乘乘黄 兩服上襄 兩驂雁行」を指す。鄭玄の箋に「襄，駕也。上駕者，言爲衆馬之最良也。」とあるので、ここの「上驤」も良馬を指すのだろう。

漩澴　水のうずまくさま。湖は箱根関の近くにある芦ノ湖を指すか。

樂飢　詩經陳風の衡門に「泌之洋洋　可以樂飢」とある。毛傳では「樂飢，可以樂道忘飢。」として「泌」の存在によって「飢」そのものの存在は解消されていないとするが、この賦をその通りに解釈すると、馬の「飢」は解消されていないものの、それを忘れるくらいに水がおいしい、となろう。

勺飲　ひしゃく一杯程の少量の飲料。

疲馬樂飢于勺飲兮　一文字多い。馬の疲れた様子と、水を喜ぶ様子を強調する。

天工　天然の中でできた細工。

騒人奪魂于天工　一文字多い。昭陽が絶景の前で呆然としている様を示す。

兕觥　兕（水牛に似る獣の名）の角で製した大杯。

斗酒入神始雄　２－２－２となり、酒を待ち望む気持ちを表わす。

［通釈］

屏風のように切り立った伊豆半島の山々は相連なって海原の向こうに横たわっており
富士山は天空の上で玉のようにすずやかである
素晴らしいその絶世の神々しい姿
ただひとり時空を超越して威儀を保っている
蒲原を出て富士川の激流を渡る
船は流れに翻弄されて水面を転がり飛蓬のようである
三島はずっと足の指が上がったままで
相模では堅い霜を踏んで行く
箱根は険しい石が乱杙歯のようであり
木が重なり合っていて日がおぼろげに見える
浮雲を踏んで上がるのに良馬を用いると
湖が山頂で渦巻いている
疲れた馬は水を一口飲んで飢えを忘れ
詩人は自然の造型の前で心を奪われる
私を大杯でねぎらうのを待て
酒が一斗心に入ってはじめてさかんになる

第十三段　（125 ～ 134）

躐繞霤而茇小田原兮		繞霤（じょうりゅう）を躐（ふ）みて小田原に茇（やど）る
劇北條之怙阻阨	入聲21麥	北條の阻阨（そやく）を怙（たの）むを劇とす
渉酒香而日南至兮		酒香を渉りて日南至し
遙稱灰觴于故國	入聲25德	遙かに灰觴を故國に稱（あ）ぐ
唁妓虎于大磯兮		妓虎を大磯に唁（とむら）ひ
覩僧鳳于鷸澤	入聲20陌	僧鳳を鷸澤に覩（み）る
騰戸塚而入武兮		戸塚を騰（こ）えて武に入り

税程谷探人穴	入聲16屑	程谷に税（と）きて人穴を探る
疋神川以東望兮		神川に疋（いた）りて以て東望すれば
舳艫𪗋𪗋于遙碧	入聲22昔	舳艫（ぢくろ）遙碧に𪗋𪗋（きういつ）す

［語注］

躐 ふむ。こえる。

繞霤 繞はめぐる。霤はのき。漢書王莽傳に出る語。顔師古の注に「謂之繞霤者，言四面塞脩，其道屈曲，谿谷之水，回繞而霤也。」とある。山が険しいために尾根や谷がめぐらされたのきの役目を果たしているということ。

茇 野宿すること。もっとも、現実に大名行列が野宿することはありえないから、小田原宿は箱根の嶮岨を越えたすぐ先の、まだ山中の続きのようなところだ、と表現しているのであろう。

躐繞霤而茇小田原兮 後半、二文字であるべきところが四文字となり、字余りである。「小田原」という三文字の地名を入れる以上やむを得ない。次の句で北条氏の城を言うので、地名を省略するわけにもいかなかったのであろう。

劇 注本に「劇秦美新之劇」とある。（更に八字続くが判読できない。）劇秦美新は揚雄が仕えていた新を称賛するために秦の「劇」（はげしさ）を引き合いに出した文。この「劇」だとするならば北条氏の滅亡を批判する言い方になるが、批判の焦点が「怙阻阨」となり、北条氏が小田原と箱根の要害を絶対視していたことで滅んだ、という流れになる。箱根の嶮岨を体験したばかりの感想としてはいささかずれるように思う。文型が劇秦美新と同じであるのは確かだが、意味までは襲っておらず、単に要害の厳しさを言うとしておく。

阻阨 「阨」を底本は「虎」に従う形に作るが、大漢和辞典にない。形近の誤である。注本に従う。「阻」も「阨」も「けわしい」の意。史記律書に出る語で、「阨」について史記集解は「戹賣反」と音注する。だが、この音「アイ」（去声15卦）では、他の四つの入声韻と押韻しない。一方で、「阨」は音「ヤク」（入声21麥）もあり、広韻には二韻を収める。「阨」の諧声符の「戹」の発音が「ヤク」（入声21麥／「阨」と同じ小韻）であることを考えると、昭陽は入声のつもりで使っていたのではないか。「ヤク」と読んでも「アイ」と意味に大差ないので、押韻を優先して「ソヤク」としておく。

酒香 字義はさけのかおりだが、ここでは酒匂川を指す。小田原宿から江戸に向かって渡る川で、広重の五十三次図にも小田原宿として酒匂川を徒歩や輿で渡る光景が描かれている。

日南至 冬至のこと。左伝の僖公五年と昭公二十年に出るのが早い用例。「冬至」の語は呂氏春秋から確認できる。

渉酒香而日南至兮 一字余り。一般的な「冬至」を使うことで字余りを回避できるが、あえて「日南至」を使って字余りにしたことで、道中で冬至を迎えた季節感を強調したのだろう。なお、文化三年の冬至は十一月十三日であり、出発日の十月一日から四十三日目となる。文化三年の十月は大の月。冬至の日付とともに「こよみのページ」（http://koyomi.vis.ne.jp/index.html）で確認した。

稱觴 「稱」は「もちあげる」意で、「杯をもちあげる」、すなわち酒を飲むこと。崔寔の四民月令（齊民要術巻三所引）に正月行事として「稱觴」という表現が出る。冬至という節目にあたって故郷を偲ぶ語として選んだのかもしれない。なお、「日南至」の初出の左伝僖公五年はちょうど正月元旦にあたる（当時は年初が十一月だったため）が、そこまで意識があったかは不明。

灰觴 灰酒を入れた觴。灰酒は清酒の一種で、灰を使って酒の酸化を防いだもの。灰持酒（あくもちざけ）

とも。陸亀蒙の「和襲美初冬偶作」詩に「酒滴灰香似去年」とあるのがそれで、陸游が老学庵筆記の中で、唐の人の酒の好みが理解できない例の一つとして挙げている。昭陽の当時、既に今の日本酒同様加熱する清酒も作られていたようで、「灰觴」と言っているのは、わざわざその製法を明示したものとなる。それが当時の小田原の名産だったのか、それとも安酒としてどこでも飲まれていたのかは不明。

遙稱灰觴于故國　一字余り。「遙」の字を入れることで、故郷との距離の遠さを強調している。

唁　とむらう。詩経鄘風載馳にあり、毛伝で「国を失った人を慰める」とし、正義で死者をいたむ「弔」と対比させているが、ここでは既にその原義はなく、単にとむらう意である。

妓虎　曽我物語に出てくる虎御前を指す。曾我兄弟の兄の十郎祐成の妾。大磯で曽我兄弟の菩提を弔って生涯を終えた。

大磯　「大」を底本は「天」に作る。注本に従う。

僧鳳　唐の僧。著に法華経疏がある。全唐詩に詩一首を録し、作者小傳に「少工文翰（少くして文翰に工なり）」と記す。その文事によって、ここでは西行を喩えている。

鷸澤　新古今和歌集に収める西行の短歌「心なき　身にもあはれは　知られけり　鴫立つ沢の　秋の夕暮れ」を指す。大磯がその場所であるという伝承が後に生まれ、昭陽の当時はそのことがよく知られていたようである。

騰　こえる。すぎる。

入武　底本は「入于武」に作る。意味は通じる。字余りになるが、その場合は最後の国の武蔵に到着したことを強調する。今は注本に従っておく。

税　注本に「税駕」とある。「税駕」は車につけた馬を解き放つことで、旅行者が休息することを言う。

人穴　世界遺産としての富士山を構成する資産の一つに人穴富士講遺跡がある。富士山の溶岩流によって形成された洞穴及びその信仰遺跡である。（富士宮市富士山世界遺産課ＨＰの説明より）　この洞穴が神奈川方面にも通じているという伝説があるが、程ヶ谷の近くの、富士山信仰に由来する浅間神社を昭陽が訪れた時に、手がかりを探ってみたのかもしれない。境内に横穴墓群があることが知られていたようで、そのことも関連するのだろう。

抵　いたる。到達点を目的語に取る。

舳艫　船のさき（舳）ととも（艫）。「舳艫相銜」「舳艫千里」は多くの船のへさきと船尾が連なっている様。ここも船がひしめいている様子を表わす。

驫矯　衆馬の走るさま。但し、ここでは船がこぞって行く様を表わす。

遙碧　遠くの青空。劉禹錫の「白鷺兒」詩に「前山正無雲　飛去入遙碧」とある。但し、ここでは実景として水平線はなく、船が空に浮かんでいるような光景には見えないので、空ではなく海の青。

［通釈］

険しい山道を踏み越えて小田原に宿を取る
北条氏が天険を頼みにしたのは確かにすさまじいものだった
酒匂川を渡河して冬至の日になり
灰持酒を注いだ杯を僻遠の地から故郷に向かって掲げる
虎御前を大磯に弔い
西行を鴫立つ沢で偲ぶ

戸塚を過ぎて武蔵の国に入り
程ヶ谷で休んだ折に人穴を探ってみた
神奈川に着いて東の海を眺めれば
多くの船の船首と船尾が連なって広い青海をこぞって進んでいる

第十四段 （135 ～ 144）

過海驛五十三兮		海驛五十三を過ぎ
仲冬之望達江都	上平11模	仲冬の望江都に達す
於上徳之神聖兮		於（ああ）上徳の神聖なる
承平二百而謐如	上平９魚	承平二百にして謐如たり
徽黜渉之宏典兮		黜渉の宏典を徽（よ）しとし
明獻替之良謨	上平11模	獻替の良謨を明らかにす
封建正于商周兮		封建は商周より正しく
朝宗嚴于唐虞	上平10虞	朝宗は唐虞より嚴なり
侯邸崢嶸以霞蔚兮		侯邸崢嶸（さうくわう）として以て霞蔚（うつ）し
車馬殷轔以電驅	上平10虞	車馬殷轔（いんりん）として以て電驅す

［語注］

海驛 海の駅路を言う語。唐の嚴維の「送李秘書往儋州」詩に「莎草山城小 毛洲海驛長」という用例がある。儋州は海南島を指すので、海のはてまでの道のりが長く遠いことを言っている。ただ、この詩の用例が日本に影響を与えたかは不明。中国の場合は海を行く道は海南島くらいしかなかったのに対して、日本の場合は海を渡ったり、海辺を通ったりするのは一般的であり、そこから自然に「海驛」という言い方は作られる。実際、日本漢詩での用例は多いようであり、昭陽もその系譜を受け継いでいると考えるのが自然だろう。

過海驛五十三兮 字数は正則だが四文字目の助字が実字になっている。「五十三」という数字を入れるためやむを得ない。

仲冬之望 十一月十五日。出発は十月一日だったので一ヶ月半の旅であった。（この年は閏月なし。） 酒匂川を渡ったのが十一月十三日であることは先に触れたが、そこから二日で江戸に到着したということになる。

江都 本来は江蘇揚州近辺の地名。ここでは江戸を指す。

仲冬之望達江都 字余り。到着の日付を強調する。また、句中の助字が実字になっている。江戸に到着した喜びを表わす。

上徳 最上の徳。

神聖 神妙で測り知ることのできないすぐれた徳を持っていること。

承平 太平が永く続くこと。

承平二百 この年は1806年なので、江戸開府からおよそ二百年が経過したところである。

謐如 安寧の様子。底本は句末に「兮」があるが、合わない。注本に従う。

承平二百而謐如 字余り。天下太平が二百年の長きに亙って続いていることを強調している。

徽 よい。

黜渉　人材を進退すること。

獻替　獻は進、替は廃、可を進め否をやめさせること。君主の補佐について言う。

良謨　よいはかりごと。

朝宗　諸侯が天子に拝謁すること。ここでは参勤交代を言うか。

崢嶸　共に下平13耕の畳韻。建物の規模が大きく奥深い様を形容する。

霞蔚　晉書顧愷之傳に、荊州の人に会稽の自然の様子を問われた答えとして、「千巖競秀，萬壑爭流。草木蒙籠，若雲興霞蔚。」と表現している。山深い様子の形容だが、ここではそのイメージを借りて、建物の奥深い様子を表わしている。

侯邸崢嶸以霞蔚兮　一字余り。大名屋敷の壮麗な様を強調する。

殷轔　殷は上平21欣、轔は上平17眞の畳韻。衆車のとどろく音の形容。

車馬殷轔以電驅　一字余り。大名屋敷の周囲の賑やかな様を強調する。

［通釈］

東海道五十三次を経て
十一月十五日に江戸に到着した
ああ最上の徳の神妙なること
天下太平は二百年続いて安寧である
人材の進退の大典をよいものとし
政治の補佐の考えをはっきりさせる
封建の道理は殷周の頃よりも正しく
諸侯の拝謁は堯舜の頃よりも威厳がある
大名屋敷は大きくて奥深く中から霞が沸き起こり
門前の車馬は大きな音を響かせて稲妻の様に疾駆する

第十五段　(145 ～ 158)

浩繁殊絶于赤縣兮		浩繁は赤縣より殊絶にして
百倍班張之攸夸説	入聲17薛	班張の夸説（こせつ）する攸（ところ）に百倍す
圉圉井谷之鮒魚兮		圉圉たる井谷の鮒魚
忻遂觀光之丕節	入聲16屑	觀光の丕節を遂げるを忻（よろこ）ぶ
竊合契于前賢兮		竊かに契を前賢に合はせ
不㕝流俗之攸悦	入聲17薛	流俗の悦ぶ攸（ところ）を㕝（よ）しとせず
襭天下之精英兮		天下の精英を襭（つまばさ）み
攬海内之豪傑	入聲17薛	海内の豪傑を攬（と）る
修曲學之暴行兮		曲學の暴行を修め
正文史之斧鉞	入聲10月	文史の斧鉞を正す
敭國士之恩光兮		國士の恩光を敭（あ）げ
蜚二人之芳潔	入聲16屑	二人の芳潔を蜚（と）ばす

垂大業于竹帛兮　　大業を竹帛に垂れ
以俟後世之聖哲　　入聲17薛　　以て後世の聖哲を俟つ

［語注］

浩繁　稠密混雑なさま。底本は「誥」に作るが、単純な誤字だろう。注本に従う。

殊絶　非常にすぐれること。諸葛亮の後出師表（三國志諸葛亮傳裴松之注）に「曹操智計, 殊絶于人。」とある。

赤縣　中国のこと。

浩繁殊絶于赤縣兮　一字余り。「殊絶」という評語を強調する。

班張　班固と張衡。班固は「兩都賦」（西都賦・東都賦）で、張衡は「二京賦」（西京賦・東京賦）で都の繁華な様を描写したが、ここはそれにも勝ると言う。

百倍班張之攸夸説　前半後半共に一字余り。班張の言うところが「夸」であることと、それの「百倍」であるという程度を強調する。

圉圉　疲れてのびやかでないさま。孟子萬章上で魚の形容として使われている。

井谷　井戸の底。

井谷之鮒魚　「井底蛙」ほどの意か。易の井卦の「井谷射鮒」は当たらない。

圉圉井谷之鮒魚兮　一字余り。己の小ささを強調する。

忻　よろこぶ。底本は「拆」に作るが意味が通じない。注本に従う。

忻遂觀光之丕節　一字余り。江戸訪問の大役を果たした喜びを強調する。

合契　割符を合わせること。

哿　よい。

流俗　世俗の悪いならわし。

不哿流俗之攸悦　一字余り。世俗を厭う気持ちを強調する。

襭　つまばさむ。衣の端を帯に挟んでその中にものを入れる。

精英　すぐれひいでたもの。

攬　とる。「攬擷」で「とりはさむ」意。底本は「棲」に作るが不明。注本に従う。

曲學　正道でない学問。

暴行　あらあらしいおこない。孟子滕文公下に「世衰道微, 邪説暴行有作。（中略）孔子懼, 作春秋。」とある。

敭　底本は「敭」に作る。但し、書写の形は共に「攴」に従っており、一画の有無の違いのみ。底本の「敭」は「あなどる」意で通じない。注本は「敭」として「古揚字」と注する。「敭」は説文解字で「揚」の古字とする。注本に従う。

蜚　とぶ。飛。昭陽の父亀井南冥が唐人町に移居して開いた私塾が蜚英館であり、それにちなんで字を選んだ。「蜚英」は「英名をはせる」意であり、この句で昭陽の両親を称揚する。

二人　注本に「父母（以下判読できず）」とある。

芳潔　芳香あって潔白なこと。

俟後世之聖哲　史記太史公自序の最後に、史記を書き残して「俟後世聖人君子。」とある。

以俟後世之聖哲　一字字余り。「以」の字の、「それによって」という感情を強調し、全篇を終える気持ちを高めている。

［通釈］

その繁多は中国よりも大いに優れており
班固と張衡が両都賦や二京賦で誇示したよりも百倍は上だ
井戸の底で鬱屈していた鮒だったが
江戸訪問の大役を果たしたのを喜ぶ
心の中で昔の賢人と意気投合し
俗世の悪習が好むところをよいとしない
天下の優れたものを選んで集め
海内の豪傑を手にする
間違った学問を修正し
春秋のような筆誅で正道を示す
国士に与えられた恩沢を称揚し
父母二人の高潔なさまを広く伝える
大業を史書に書き残し
それによって後世の聖哲の適正な評価を待つ

［補説］

注本末尾に「文政三年冬十二月　筑前龜井昱元鳳題」とある。出発は文化三年、1806年の十月一日で、その年の十一月十五日に江戸に到着したことが作中で述べられているが、翌文化四年、1807年には福岡に戻っている。文政三年は1820年で、江戸訪問から十四年の後となる。

全158句の構成を改めて確認すると次の通りである。

001-010　出発まで
011-022　福岡～岡山
023-030　池田光政故事（岡山）
031-040　岡山～大坂
041-048　大坂遊覧
049-054　淀川
055-064　宇治
065-082　京
083-136　東海道
137-148　江戸の様子
149-158　決意表明

大坂・宇治・京に筆を費やすのは当然の成り行きだろうが、それ以外に岡山で池田光政を詳しく描写している。閑谷学校等の学問への業績を評価したためであろう。

noda［@］tc.nagasaki-gaigo.ac.jp